

## 校長室だより

2025年2月21日

### “フェイク”とともに生きる未来<sup>あす</sup>

ちょっと、次のような場面を思い浮かべてみてください。君は、同じクラスのA君と日曜日に遊ぶということになり、「水戸駅の改札前に11時ね！」と約束をしました。日曜日、君は約束の時間に水戸駅に到着し、A君を待っていたのですが、いくら待ってもA君は現れません。30分後、待ちくたびれて君が帰ろうとしていると、そこへ汗だくになってA君が走ってきました。ムッとした君が、「A君、30分も遅刻だよ！いったいどうしたの？」と尋ねると、A君は息をハアハアさせながら、「ごめん、でも今、大変だったんだ。駅の北口で、黄門様と助さん格さんの像の前を通りかかったら、突然その陰から印籠<sup>いんろう</sup>を持った3人の宇宙人が現れて、ボクをさらおうとしたんだよ！ボクはさらわれないように必死で抵抗して、今、やっと逃げてきたんだ。ウソじゃないよ」と言います。さて、君だったらどう対応するでしょうか？

「えっそうだったの？それってヤバいやつじゃん？警察に言った方がいいよ！」と言って、A君と一緒に交番に駆け込む、という人は少数派でしょう。（ていうか、いないか？）。ほとんどの人は「A君は寝坊か何かして約束の時間に遅刻したに違いない。それを怒られないように、宇宙人のせいにしてウソをついているんだな」と考えることでしょう。しかし、ここで質問です。君は、A君の言うことをウソだと断定する根拠を示すことはできますか？「ボクの話に疑いのなら、ウソだと証明してみせてよ」というA君のことは、君はどう答えることができるでしょうか？

「フェイクニュース」ということばを頻繁<sup>ひんぱん</sup>に耳にするようになったのは、第1次トランプ政権誕生につながるアメリカ大統領選が行われていた2016年ごろのことです。選挙戦の中でドナルド・トランプ氏は、マスメディアが報道する自分に不利な情報に対し「フェイクニュースだ！」と非難し、反論していました。フェイク（fake）とは「偽物、でっちあげ」を意味します。既存のメディアに対する「フェイクニュース」という批判は、陰謀論（注1）とも結びつき、トランプ氏の選挙戦を優位に導いたのです。

しかし、フェイクニュースそのものは、決して目新しいものではありません。考えてみると、偽情報は人間社会の中で常に存在してきました。例えば、イソップ物語のオオカミ少年の話などはその典型でしょう。人々が慌てる様子が面白くて、何度も「オオカミが来たぞー！」とウソをついた少年が、本当にオオカミがやって来たとき誰にも信じてもらえなかったという話を、君も一度は読んだり聴いたりしたことがあるでしょう。H.G ウェルズの小説『宇宙戦争』の話も有名です。1938年、アメリカのラジオ局が、『宇宙戦争』をラジオドラマ化して放送しました。すると、それを聞いた人々が、本当に火星人が地球に襲来したと思い込み、そのニュースが拡散され、全米で大パニックが発生したのです。これなどもフェイクニュースがもたらした珍事といえるでしょう。

このように昔からあるフェイクニュースですが、しかし、なぜ近年になって改めて大きな注目を

集めているのでしょうか？千葉大学教授の山田圭一さんは、その著書『フェイクニュースを哲学する／何を信じるべきか』（岩波新書）の中で、うわさとインターネットの関係について触れています。そこでは、リアル社会では、うわさなどの情報が広まる範囲は限定されている。それは近い人間関係を経由して伝わっていき、伝える行為そのものに一定の時間がかかるので、短時間に広範囲に情報を伝えることは不可能であった。ところがインターネットは、まさにその不可能を可能にした、とあります。フェイクニュースは、インターネットやSNSと結びつくことにより、より多くの、より多様な人々のもとへ、瞬時に伝わることとなり、結果としてフェイクニュースが社会に蔓延<sup>まんえん</sup>し、さまざまな問題を生じさせているのが現代という時代だ、というわけです。

山田さんはフェイクニュースを、「情報内容の真実性が欠如しており、かつ、情報を正直に伝えようとする意図が欠如している」ものと定義したうえで、ネット上のフェイクニュースを①偽なる発言で欺こうとしている場合、②ミスリードな内容で欺こうとしている場合、③偽であり、でたらめである場合、④ミスリードであり、でたらめである場合、の4つのタイプに分類しています。

フェイクニュースと聞いて私たちがすぐ思い浮かべるのは①かもしれませんが、実際にはそれだけにとどまりません。本の中では②の例として、「暴徒1000人がドイツ最古の教会に放火」という見出しで「“アッラーは偉大なり”と唱える男たちが花火を打ち上げ、由緒ある教会に放火した」と書かれた記事を挙げています。しかし、実際には群衆の一人が放った花火が教会の周囲を覆っていた網に誤って着火してしまったのであり、火はすぐ消し止められるほど小さかった、というのが事実でした。その情報は「虚偽」ではないが、それでも全体として読者を意図的に間違った理解へ誘導する「ミスリード」だと言えます。

③の「偽であり、でたらめである場合」には、2016年のアメリカ大統領選前にマケドニアのティーンエイジャーたちが流したフェイクニュースの例が紹介されています。このケースで当のティーンエイジャーたちは、自分たちが発信した情報が真実であるか虚偽であるかについては何の関心も抱いていなかった、といいます。彼らが情報を発信した目的は、人々にできるだけそのサイトをクリックさせ、広告収入によって多くのお金を生み出すことでした。彼らにとって、情報が正しいかどうか、それによって人々が何を信じることになるのかは、どうでもよいことだったのです。

現在、ネット上には、上記のようなフェイクニュース（あるいはフェイクニュースと疑わしいもの）が跳梁跋扈<sup>ちやうりやうばつこ</sup>しています。これらのウソを見破り、正しい情報と偽情報を区別するよい方法はないのでしょうか？

『フェイクニュースを哲学する…』で山田さんは、私たちの日常的な知識は、他人の証言に依存することが避けられないとしたうえで、他人の証言が信用できるかどうかを判断するポイントを三つあげています。一つ目は一致条件。証言者が過去に行った証言が、多くの場合において事実と一致していたかどうか、ということです。二つ目は誠実性条件。その証言が誠実に、つまり嘘や冗談やでたらめでなく為されているかどうかです。そして三つ目が能力条件。証言者がその内容を知る能力を持つか、あるいは知りうる立場にあるか、という点です。この三つの条件を、リアルの場合とネットの場合で比較してみるとどうなるでしょう？

一致条件について言えば、リアル社会では、その人の証言を過去にさかのぼることは比較的容易です。例えば冒頭の例で、A君が、これまでウソやでたらめなど言ったことのない正直者で、正確な事実のみを語るのが常だったとしたら、もしかしたら宇宙人の話もまんざらウソじゃないかも？と思えるかもしれません。一方でA君が、「昨日の夕方、学校のトイレで、“トイレの花子さん”

見ちゃったよ」とか「これ絶対ナイショなんだけど、実はボク、テレパシーでUFO呼べるんだ」などと普段から口にしていたとしたら、「またかよ」となることでしょう。しかし、匿名性の高いネット上では、発言と発言者を紐づけることは難題です。同じハンドルネームを用いて他人になりすましたり、アカウントを消去したり新しいアカウントを設定したりすることが簡単にできてしまうネット上では、一致条件を適用することはほぼ不可能といえます。

誠実性条件はどうでしょう？リアル社会で私たちは、証言者の発言内容だけでなく、その目つきや表情、口調などを、発言が正しいかどうか判断する材料にすることができます。証言者の目が泳いでいる、話し方がいかにもわざとらしい、などの特徴が見られる場合、嘘を疑いたくなりますよね？また、発言内容以外の情報から証言の真偽を推理することも可能です。冒頭の例でいえば、A君の髪の毛が寝ぐせだらけでボサボサだったり、上半身は着替えているけどズボンはパジャマのままだったりしたら「A君、キミ、ひょっとして寝坊したんじゃない？」となるはずです。ところがネット上では、証言者の表情はもちろん、証言を裏付ける(あるいは否定する)証拠となる、証言者に付随する情報を得ることは容易ではありません。三つ目の能力条件についても、証言者の姿が見えないネット上では、その人の能力や立場を知ることが難しいのは同様です。

以上のように、私たちがリアル社会で行っているような判定を、ネット上に発信された情報、他人の発言の真偽について行うことは困難である、と山田さんは述べています。それでは、インターネット上に広がるフェイクニュースに対して私たちはどのように向き合えばよいのでしょうか？

この問いに答える前に、マスメディア(注2)とインターネットの関係についても考えてみましょう。

2024年1月1日、能登地方を最大震度7の大地震が襲いました。能登半島地震です。この地震は、東日本大地震のような津波こそもたらさなかったものの、多くの家屋が倒壊し、生活インフラが破壊されるなど、能登地方に甚大な被害をもたらしました。

ところが地震発生翌日の1月2日、NHKのウェブニュースサイトに、「SNSで“人工地震が原因”など不安あおる偽情報投稿拡散」という見出しの、次のような記事が掲載されました。「今回の地震や津波に関連して、旧ツイッターのXで偽情報が拡散されていますが、NHKの取材班が確認したところ、地震の原因が“人工地震”だと主張して不安をあおる根拠のない情報や、原子力発電所や避難所の状況などについての誤った情報が広がっています。安易に拡散すると、被災地での救助活動や避難の際に混乱が起きるおそれもあるため、冷静な対応が必要です」。中には、過去に北朝鮮が核実験を行った際の気象庁の会見の動画など、地震とは関係のない根拠を用いて主張する偽情報もあったといいます。

さて、NHKがフェイクニュースを打ち消すこの記事を出したことで、人工地震説は縮小、消滅していったのでしょうか？現実には、そうはなりません。テレビや新聞、ラジオなど旧来の大手マスメディアが人工地震説を否定すれば否定するほど、一部の人々は「メディアがこんなに躍起<sup>やつき</sup>になって否定していること自体が、誰かの陰謀によって地震が引き起こされた証拠だ」と考える方向に向かったのです。

同じように、SNSの影響が注目をあびた典型的な事例が、2024年の兵庫県知事選です。県知事だった斎藤元彦氏は、パワハラなどの疑いにより議会からの不信任決議を受けて失職しました。当時、テレビや新聞などの大手メディアは、こぞって斎藤氏を批判するニュースを報じていました。失職後に改めて知事選に立候補を表明した斎藤氏ですが、当初は再選は無理という見

方が圧倒的でした。しかし、11月に行われた選挙で斉藤氏は快勝、県知事への復職を果たしたのです。この大逆転ともいえる勝利を支えたのがSNSでした。「斉藤氏のパワハラはなかった」「大手メディアは偏向報道を行った」などの情報が拡散され、その情報を信じた有権者たちは斉藤氏再任を選択したのでした。

こうした現象からは、SNSやインターネットの持つ強大な影響力と同時に、オールドメディアとも呼ばれる既存の大手マスメディアへの、人々の根深い不信を見て取ることができます。『フェイクニュースを哲学する…』で山田さんは、マスメディアとネット上の情報の信頼性について、「すべてのマスメディアに信頼を置いているわけではない」という条件付きではあるものの、「少なくとも私は実生活において、多くの場合既存のマスメディアが伝える情報をネット上の情報よりも信頼している」と述べています。ネット情報よりもマスメディアを信頼する理由としては、①ジャーナリストには知的自立性の発揮が求められていること（ジャーナリストは複数の情報源から証言や証拠を集めて検証作業を行い、相手の証言が自分の取材結果と合致しなかった場合は、質問や反論をしながら相手から新たな証言を引き出していく）、②職業ジャーナリストには真理へのインセンティブ（注3）がはたらくこと（間違った情報を発信することは、ジャーナリストにとって自分や自分の属する組織の信頼を損ね、不利益をもたらす）、③大手マスメディアには、報道内容の事前チェックと事後チェックのシステムが設けられていること、などをあげています。

このように、マスメディアからの情報が様々なチェックやフィルターを通過した上で発出されるものであるにもかかわらず、現在、程度の差こそあれ大手マスメディアへの不信感を抱く人の割合が、かつてなく高まっているように思います。少し前のことになりますが、公文書が改ざんされた森友学園問題では、政権に忖度するマスメディアの姿勢が問題視されました。大手芸能事務所トップの人物による性加害が明るみに出た際は、マスメディアは自分たちの利害を優先して真実を報道してこなかったのではないかと批判が巻き起こりました。こうした事件が繰り返される中で、マスメディア不信の空気感は徐々に高まっていったといえるでしょう。

しかし、これをマスメディアかネットかという単純な二元論に落とし込んで考えることは危険です。インターネットに目を移すと、マスメディアとくらべて情報発信の制約が極めてゆるい（ほぼ存在しない）ネット上には、多種多様な意見が存在します。その中には、地球が丸いというのは実はウソで、地球は平面からできている、とか、ナチスによるホロコースト（注4）は虚偽で実際にはそんな事実はなかった、など私たちの常識から大きくかけ離れたものも少なからず存在しています。山田さんは、こうした主張に触れることは、間違った信念が増えることにつながるだけでなく、体系的な科学否定論や陰謀論への道を開いてしまう危険性を秘めている、と警告しています。

それにしても、人はなぜ「地球平面論」や「ホロコースト否定論」のような極端な情報を信じてしまうのでしょうか？山田さんは、インターネットが人間にある信念を植え付けるしくみとして、「フィルターバブル」と「エコーチェンバー」という二つの現象をあげています。フィルターバブルとは、利用者の検索履歴や購買情報などの行動パターンを読み取った検索エンジンが、その人の思想や行動特性に合わせた情報ばかりを作為的に表示するしくみを指します。エコーチェンバーは、SNS上などで自分と同じような意見ばかりが跳ね返ってくる状態になることです。例えば、選挙で自分の支持する候補の問題発言やスキャンダルがどんなにメディアで報じられても、彼を支持するコミュニティ内部においてはそれらが問題視されず、むしろ支持の声が高まっていくという現象です。

テレビ番組であれば、多くの人々が同じ番組を見て、体験を共有します。しかしパーソナライズ（注5）されたネット情報では、他者との体験の共有が妨げられます。山田さんは、フィルターバブルの問題点を、一人ひとりが孤立し、選択されなかった情報や選択されなかったプロセスが目に見えず、また私たちがそのような状況におかれることを自分で選べない、という三点で説明しています。フィルターバブルが情報の与えられ方の問題だとすれば、エコーチェンバーの問題は情報の検証のされ方の問題です。山田さんはエコーチェンバーの問題点として独立性の欠如と多様な観点の欠如の二点を挙げ、「エコーチェンバー内の意見は同じ内容のものが多いが、元をたどるとしばしば同じ情報源から派生している（独立性の欠如）」「エコーチェンバーに集まっている人たちがいる特定の指導者的な存在に対して無批判に従うフォロワーとなってしまう（多様な観点の欠如）」と書いています。ネットという孤独な空間の中で一方的に送り付けられる情報を浴び続け、かつ同じ情報源からの情報を信じる人々による閉じたコミュニティ内で、自分の考えを肯定する意見に接し続けたとしたら、多様なものの見方が失われ、偏った特異な思想が生じるのも無理のないことかもしれません。

現在、ネット上には、悪意や偏見に満ちた、あるいは利己的で無責任なフェイクニュースが蔓延しています。そして私たちは、それらが正しい情報か否かを判断する有効な手段を持ち合わせていません。既存のマスメディアへの不信感が高まる一方で、閉鎖的なネット空間のもたらすバイアス（注6）によって考え方やものの見方が無自覚に固定化されていく中、私たちは何を信じればよいのでしょうか？真偽不明の膨大な情報を前にして、どのようにふるまえばよいのでしょうか？

私たちは一人ひとりが生まれ育った環境も、影響を受けた文化風土も異なります。そんな私たちがあるものを見たり、考えたり、評価したりするとき、そこにある偏りが生じ、個人の主観や価値観が紛れ込むことは避けられません。そのとき必要なのは、そのバイアスを自覚し、自分のものの見方、考え方は本当に正しいだろうか？偏見や利害のため、公平な判断を歪めていないだろうか？という、自己を批判的に客観視する視点だと思います。“フェイク”は一方的に、私たちの外部からやってくるものではありません。それを受け入れる私たちの中にも“フェイク”は存在しているのです。

山田さんは『フェイクニュースを哲学する…』の最終章で、「急ぎすぎないこと」の大切さを説いています。「自分の手に入れた回答が“正しい”という思い込みをいったん取り去ることで、その回答の根拠は本当に妥当なのか、何か見落とししている観点がなかったり、別の考え方ができたりするのではないかと吟味する余地が生じ、自分の考えをさらに先に進めていくことができる」と述べています。受け入れるべきかどうか迷ったとき、真偽の判断をいったん保留し、その情報と向き合い妥当性や信頼性を吟味すべきだという山田さんのことばは、この先もずっと“フェイク”とともに生き、“フェイク”の海を渡っていかなければならない私たちにとって、大切な羅針盤になると感じました。

「なるべく3～4ページ以内でコンパクトに」を目指して書いている校長室だよりですが、またまた5ページの長文となってしまいました。さてそこで、ここまで粘り強く読んでくれた生徒諸君への感謝の意を表し、今回は特別に筆者の秘密をこっそりと教えたいと思います。実はボク、故ダース・ベイダー先生からの教えを受け、闇のフォースを操ることができるのです（小声）。さてさて君は、この事実を信じてくれるかな？（終）

注1)陰謀論

何らかの出来事や状況が生じたとき、根拠の有無を問わず、それが邪悪で強力な意志を持った組織の陰謀によるものだ、と断定する考え方。アメリカの極右が提唱する、世界を裏で支配する闇の政府「Qアノン」が存在し、トランプ氏はそれと戦っているとする主張などが知られている。

注2)マスメディア

マスコミュニケーション(＝不特定多数の大衆に大量の情報を伝達すること)を行う媒体のこと。新聞、テレビ、ラジオ、映画、雑誌などを指す。

注3)インセンティブ

ある行動を促す、刺激や動機、誘因。

注4)ホロコースト

第二次世界大戦中にナチス・ドイツがユダヤ人に対して行った、絶滅政策にもとづく大量虐殺。当時ヨーロッパにいたユダヤ人の3分の2にあたる600万人が犠牲になったと言われる。

注5)パーソナライズ

個人の行動履歴や購買履歴に基づき、サービスや情報を提供すること。

注6)バイアス

偏り、偏見、先入観。ある特定の考え方に偏った態度。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。